

脱資格 安全論



脱資格安全論

吉田 峻（よしだ しゅん）

人は慣れる。

危険にも。

違和感にも。

同調圧力にも。

だが命は、

慣れに殺される。

目次

はじめに

—なぜこの本を書いたのか—

資格と現場のあいだにある大きな溝。

長年の安全教育の中で感じてきた違和感から、本書の問題提起が始まる。

序章

資格社会ニッポン

日本は世界でも有数の資格社会である。

しかし資格が存在するにもかかわらず事故は起き続けている。その矛盾を問い直す。

第1章

資格という幻想

「資格があれば安全」

という社会の思い込みを問い直す。

資格は安全の保証ではなく、あくまで入口にすぎないという現実を明らかにする。

第2章

資格は武器である

資格とは肩書きではなく、命を守るための武器である。

しかし武器は持つだけでは意味がなく、
使い続け、磨き続けなければ力を持たない。

第3章

事故はどこから生まれるのか

事故は突然起きるのではない。

慣れ、油断、慢心、思い込みという人間の心理が、
日常の中で事故を育てていく。

第4章

安全四層理論

安全は一つの要因ではなく、

技術・習慣・心理・文化という四つの層によって支えられている。

事故を構造として理解するための理論を提示する。

第5章

人は慣れに殺される

人間の適応能力は、同時に危険でもある。

危険・違和感・同調圧力への「慣れ」が事故を生むメカニズムを描く。

第6章

遺族の一日

事故は一瞬で終わる。

しかし遺された人の時間は終わらない。

事故の数字の裏側にある現実を描く章。

第7章

安全は独占するものではない

安全の知識は閉じるものではなく広げるべきものである。

安全文化を社会全体で共有する必要性を説く。

あとがき

—それでも、明日も現場は動く—

安全とは「当たり前の日」を守ること。

現場で働くすべての人へのメッセージ。

はじめに

—なぜこの本を書いたのか—

私は長年、
労働安全の講習に関わってきた。
フォークリフト技能講習。
特別教育。
作業主任者講習。
数えきれないほどの受講者と出会い、
数えきれないほどの現場の話を聞いてきた。
そして
その中で、
ずっと心に引っかかっていたことがある。
それは
資格と現場のあいだにある、大きな溝
である。
講習では、
安全な作業方法を教える。
危険を説明し、
事故の事例を伝え、
安全な手順を学ぶ。
受講者は真剣に話を聞き、

試験に合格する。

そして

資格を取得する。

しかし

現場に戻ったとき、

講習で教えた通りに作業している人は
決して多くない。

これは

受講者が悪いわけではない。

むしろ

現場の現実がそうさせている。

物流の現場では

時間が追いかけてくる。

作業は止まらない。

効率が求められる。

そして

いつの間にか

「いつものやり方」

が

安全よりも優先されることがある。

たとえば

フォークリフト。

講習では

安全な運転方法を教える。

しかし

現場の運転は

検定の運転とはまったく違う。

検定通りに運転していたら

仕事が進まない。

また

近年新設された特別教育に

テールゲートリフターがある。

講習では

荷物と一緒に昇降してはいけない

と教える。

しかし

現場では

そのルールが守られていない場面を

私は何度も見てきた。

ここにあるのは

現実と制度の乖離

である。

資格制度は

決して間違った制度ではない。

むしろ

必要な制度である。

資格とは
最低限の知識と技術を
学ぶための仕組みだからだ。
だが

一つだけ
はっきり言えることがある。

**資格だけでは
命は守れない。**

資格は
安全の完成ではない。
安全の

入口

である。
資格を取った瞬間に
安全になるわけではない。
資格を取った瞬間に
事故が防げるわけでもない。
本当に重要なのは
その後である。

私は
長年講習を続ける中で
ある考えにたどり着いた。
それは

次の言葉に集約される。
資格は飾りではない。
資格は武器である。
だが
武器は持っているだけでは意味がない。
そして
使っているだけでも
安全にはならない。
慣れ。
油断。
慢心。
思い込み。
事故は
いつもそこから始まる。
武器は
研ぎ続けてこそ
命を守る力になる。
安全とは
資格の中にあるものではない。
安全とは
現場の中で、
人が考え続ける行為である。
本書は

資格制度を否定する本ではない。

資格制度を

過信する社会

に疑問を投げかける本である。

安全とは何か。

なぜ事故は起きるのか。

なぜ人は危険な行動をするのか。

そして

どうすれば事故を減らすことができるのか。

その問いを

現場の視点から

もう一度考え直す。

それが

本書の目的である。

もしこの本が

安全を学ぶ人

安全を教える人

安全を管理する人

その誰かの中に

ほんの少しでも

新しい問いを生み出すことができたなら。

それだけで

この本を書いた意味はある。

安全とは
制度ではない。
資格でもない。
安全とは
人の意識の中にしか存在しない。
だからこそ
安全は
考え続けなければならない。
この本が
その思考の
きっかけになることを願っている。

序章

資格社会ニッポン

日本は、世界でも珍しいほどの資格社会である。

仕事をするためには、

多くの場合「資格」が必要になる。

フォークリフトを運転するには資格。

玉掛け作業をするには資格。

高所作業車を扱うにも資格。

現場には、数えきれないほどの資格が存在する。

それらはすべて

安全のために作られてきた制度である。

事故を防ぎ、

労働者の命を守るために。

その理念自体は、決して間違っていない。

しかしここで一つ、

私たちは考えなければならない。

資格は本当に安全を守っているのだろうか。

日本では毎年、多くの労働災害が発生している。

その中には、命を落とす事故も少なくない。

だが事故の報告書を読むと、

ある事実に気づく。

それは

事故を起こした多くの人が、資格を持っていたという事実である。

つまり

資格があるにもかかわらず
事故は起きている。

この現実を前にして、

私たちは一つの疑問を持たなければならない。

もし資格が安全を守るのであれば、

なぜ事故は起きるのか。

もし教育が十分であるなら、

なぜ人は危険な行動をするのか。

資格とは本来、

知識と技能を身につけるための入口である。

講習を受け、

基本的な知識を学び、

最低限の技能を習得する。

そして試験に合格する。

ここまでの資格制度の役割である。

しかし現実には、

この入口が

ゴールになってしまっている。

資格を取得した瞬間、
多くの人はこう考える。

「これで大丈夫だ」
と。

しかし安全とは、
その瞬間から始まるものなのである。

資格とは

命を守るための武器である。

だが武器は、
持っているだけでは役に立たない。
使い続け、
磨き続け、
理解を深めなければならない。
磨かれない武器は錆びる。
使われない技術は鈍る。
安全も同じである。

私は長年、フォークリフトの技能講習に関わってきた。
講習では、
安全な運転方法を教える。
確認動作を教える。

危険を避ける方法を教える。
受講者はそれを学び、
実技試験に合格する。
そして資格証を手にする。
だが現場に戻ると、
その通りに運転する人はほとんどいない。
理由は単純だ。
その運転では仕事が回らないからである。
もし講習で教える通りの速度で走り、
一つ一つの確認を丁寧に行い、
すべての操作を慎重に続けていたら、
多くの物流現場は
確実に滞る。
ここに
安全教育の大きな断絶がある。

同じことは
テールゲートリフターの作業でも起きている。
講習では、
荷物と一緒に昇降板に乗ってはいけないと教える。
転落事故を防ぐためである。
しかし多くの現場では、
作業者は荷物と一緒に昇降板に乗る。

その方が

圧倒的に効率が良いからである。

制度は安全を求める。

現場は効率を求める。

そして多くの場合、

勝つのは効率である。

この現実を見ないふりをして

安全教育を続けても意味はない。

事故は

教習所ではなく

現場で起きるからである。

本当に考えるべきなのは

なぜ現場では

教習通りの安全が守れないのか。

という問題である。

多くの事故の原因は

「知らなかった」

ではない。

知っていた。

だが

守れなかった。

あるいは
守らなかった。
そこには必ず理由がある。

人は怠け者だから危険なことをするわけではない。
多くの場合、
現場の構造が
危険な行動を
当たり前にしてしまうのである。
効率。
時間。
同調圧力。
それらが重なり、
危険な行動は
いつの間にか普通の作業になる。
そして事故は、
その普通の作業の中で起きる。

事故が起きると、
人は原因を探す。
そして多くの場合、
こう言う。
「作業者のミスだ」

と。

しかし本当にそうだろうか。

事故とは

個人のミスではなく

構造の結果

であることが多い。

本書は、この構造を見つめ直すために書かれた。

資格を否定するためではない。

資格の本当の意味を

取り戻すためである。

資格は安全の入口である。

しかし

安全そのものではない。

安全を守るのは

制度だけではない。

教育だけでもない。

本当に事故を止めるのは

人と組織が作る文化である。

その考え方を

脱資格安全論

と呼ぶ。

ここから本書は、
次の問いに向き合っていく。
なぜ資格者が事故を起こすのか。
なぜ安全教育は形骸化するのか。
そして
どうすれば現場で本当に事故を減らすことができるのか。
その答えを探す旅が、
ここから始まる。

第 1 章

資格という幻想

多くの人はこう考えている。

資格を取れば安全になる。

資格を持っていれば安心だ。

資格者がいれば事故は起きない。

この考えは、あまりにも当たり前のように社会に浸透している。

企業もそう思い、現場もそう信じ、行政の制度もまたその前提の上に成り立っている。

だが、ここで一つの問いを投げかけたい。

本当にそうだろうか。

もし資格が安全を保証するのなら、

世の中から事故はとっくに消えているはずだ。

しかし現実はどうだろう。

建設現場では、

資格者が重機を操作して事故を起こす。

工場では、有資格者が機械に巻き込まれる。

高所作業では、資格を持つ作業員が墜落する。

そしてその事故報告書には、こう書かれている。

「作業者は必要な資格を保有していた。」

つまり事故は、

資格を持っている人間によって起きている。

ここに、安全教育の最大の盲点がある。

資格は、安全を保証しない。

もう一度言う。

資格は、安全を保証しない。

資格とは、本来何か。

それは

「一定の知識や技能を持っていることを証明するもの」

である。

つまり資格とは、

安全そのものではない。

安全に関わる知識や技能を持っているという

入口の証明にすぎない。

ところが現場では、この入口がいつの間にか

ゴールのように扱われている。

資格を取った。

講習を修了した。

免許証を持っている。

だから大丈夫。

そう思った瞬間に、

安全は静かに崩れ始める。

人は安心すると油断する。
そして油断は、事故の入口になる。
実際の事故を分析すると、
驚くほど共通する原因が見えてくる。
それは、技術不足ではない。
むしろ逆だ。

慣れ

油断

慢心

思い込み

こうした心理が、事故の背後に必ず存在している。
長年やっているから大丈夫。
今まで事故はなかった。
このくらいなら問題ない。
こうした小さな判断の積み重ねが、
ある瞬間に取り返しのつかない結果を生む。
事故は突然起きるわけではない。
それは、
日常の中でゆっくりと育つ。
そしてその多くは、
資格者によって起きている。
ここで誤解してほしくない。
資格が無意味だと言っているわけではない。

むしろ逆だ。

資格は重要だ。

知識も技能も、極めて重要である。

しかし問題はそこではない。

資格だけでは安全は作れない。

これが現実である。

資格を持っていることと、

安全に行動できることは、

実はまったく別の能力なのだ。

資格は武器である。

だが武器は、

持っているだけでは意味がない。

そして、

使っているだけでも安全にはならない。

武器は、

常に研ぎ続けなければならない。

知識は更新されなければならない。

技能は磨かれ続けなければならない。

そして何より、

人の意識と行動は、変わり続けなければならない。

安全とは、

一度手に入れて終わるものではない。

毎日、作り続けるものだ。

資格を取ったその日から、
安全は始まる。
だが同時に、
その瞬間から事故の可能性もまた始まる。
資格は安心ではない。
資格はスタートラインである。
もし私たちが
「資格があるから安全だ」と思っているなら、
それこそが
最も危険な思い込みなのかもしれない。

第 2 章

資格は武器である

資格は飾りではない。

資格は武器である。

この言葉に違和感を覚える人もいるかもしれない。

しかし現場の世界では、これは紛れもない事実である。

重機を操作する。

高所で作業する。

危険物を扱う。

大型機械を整備する。

こうした作業は、一歩間違えれば人の命を奪う力を持っている。

だからこそ社会は、

一定の知識と技能を持つ者にだけその作業を許している。

それが資格制度である。

資格とは、

危険な仕事を扱うために与えられる

責任の証明だ。

そしてその責任は、
単なる肩書きではない。
それは

人の命を預かる権利

でもある。
だから資格は飾りではない。
それは現場で使うための

武器

なのである。
しかし、ここで一つの問題がある。
多くの人が

この武器を誤解している。

資格を取った。

講習を受けた。

免許証を手に入れた。

その瞬間、

多くの人はこう思う。

「これで大丈夫だ」

だが現実は違う。

武器は

持っているだけでは意味がない。

例えば、どんなに優れた刀でも

鞘に入れたままでは何の力も持たない。

使われなければ、
ただの金属である。
資格も同じだ。
講習で学んだ知識も、
試験で覚えた内容も、
現場で使われなければ
何の意味もない。

しかし問題は、そこだけではない。

実は

使っているだけでも安全にはならない。

ここが、多くの人が見落としている点である。

人は慣れる。

作業に慣れる。

機械に慣れる。

環境に慣れる。

そして慣れは、

少しずつ人の感覚を鈍らせていく。

最初は慎重だった作業も、

いつの間にか雑になる。

最初は確認していた手順も、

いつの間にか省略される。

「これくらい大丈夫」

「今まで問題なかった」

その小さな判断が、
やがて事故の入口になる。
事故の多くは、
未経験者ではなく
経験者によって起きている。
資格を持っている。
経験もある。
仕事も慣れている。
だからこそ
人は油断する。
そしてその油断が、
事故を引き起こす。
事故は突然起きるわけではない。
その背後には必ず、
慣れ
油断
慢心
思い込み
がある。
慣れは油断を生む。
油断は確認を省く。
確認を省けば、
事故はすぐそこに現れる。

つまり問題は

資格ではない。

資格を持った人間の状態

なのである。

ここで、武器の話に戻ろう。

武器には

もう一つ大切な性質がある。

それは

手入れをしなければ鈍る

ということだ。

刀は研がなければ切れなくなる。

機械も整備しなければ壊れる。

資格も同じである。

講習で学んだ知識は、

時間が経てば忘れる。

技能も、

意識しなければ衰える。

そして最も危険なのは、

慣れによって判断が鈍ること

である。

だから武器は

持つだけでは足りない。

使うだけでも足りない。

武器は

研ぎ続けなければならない。

知識を更新する。

技能を磨く。

自分の判断を疑う。

そして常に

「本当に安全か」

を問い続ける。

それができて初めて

資格は武器になる。

命を守る武器になる。

資格とは、

ゴールではない。

それは

安全への入口

にすぎない。

資格を取った瞬間に、

安全が完成するわけではない。

むしろ逆だ。

その瞬間から

本当の安全が始まる。

武器を持つとは、

責任を持つということだ。

その責任とは、
自分の命だけではない。
仲間の命。
現場の命。
社会の命。
それらすべてに関わる。
だからこそ、
資格は軽いものではない。
それは
命を守るための武器
なのだ。
そして武器は、
研ぎ続けてこそ
命を守る力になる。

第3章

事故はどこから生まれるのか

事故は突然起きる。

多くの人はそう思っている。

ある日突然、

予想もしない出来事が起き、

不運が重なり、

事故が発生する。

しかし本当にそうだろうか。

現場で起きた事故を一つひとつ見ていくと、

そこには必ず共通する流れがある。

事故は、突然生まれるわけではない。

それは

日常の中で静かに育つ。

事故の多くは、

危険な作業をしているときに起きるわけではない。

むしろ逆だ。

「いつも通りの作業」

「慣れた仕事」

「何度もやっている手順」

そうした日常の中で起きる。

これは決して偶然ではない。
人は慣れる生き物だからだ。
同じ作業を何度も繰り返すと、
人はその環境に適応する。
最初は慎重だった動作も、
回数を重ねるうちにスムーズになる。
確認していた手順も、
経験によって省略できるようになる。
これは本来、
効率を高めるための人間の能力である。
しかし同時に、
そこには大きな落とし穴がある。
慣れは安心を生む。
そして安心は、
警戒心を下げる。
最初は必ず確認していた場所を
いつの間にか見なくなる。
最初は守っていた手順を
いつの間にか省略する。
「このくらい大丈夫」
この言葉が頭に浮かんだとき、
事故はすでに始まっている。

事故の多くは、
機械の故障や設備の欠陥ではない。

それは

人の判断の変化

から始まる。

そしてその判断の変化は、
ある四つの心理から生まれる。

慣れ。

油断。

慢心。

思い込み。

慣れは油断を生む。

油断は確認を省く。

確認を省けば、

危険は見えなくなる。

そして見えなくなった危険は、
ある瞬間に姿を現す。

それが事故である。

ここで重要なのは、

事故を起こした人の多くが
決していい加減な人間ではない
という事実だ。

むしろ逆だ。

真面目な人。
経験のある人。
仕事に慣れた人。
そういう人が事故を起こしている。
なぜか。
それは
経験があるからこそ
判断を早くしてしまうからだ。
人は経験が増えるほど、
無意識で判断するようになる。
一瞬で状況を判断し、
体が自然に動く。
これは熟練の証でもある。
しかしその反面、
確認するという行為が減っていく。
「大丈夫だろう」
この一瞬の判断が、
取り返しのつかない結果を生む。
事故は、
無知から生まれるとは限らない。
むしろ
慣れた人ほど事故に近づく
ことがある。

ここに、
安全教育の難しさがある。
多くの安全教育は、
知識を教える。
ルールを教える。
手順を教える。
危険を説明する。
もちろんそれは重要だ。
しかし事故の多くは、
知識不足ではなく
心理の変化
から起きている。
人は慣れる。
危険にも。
違和感にも。
沈黙にも。
最初は怖かった作業も、
繰り返すうちに恐怖は消える。
最初は気になっていた小さな違和感も、
いつの間にか気にならなくなる。
そしてやがて、
危険そのものが日常になる。

そのとき事故は、
すぐ隣にいる。
事故とは、
特別な出来事ではない。
それは
日常の延長線上にある。
いつも通りの作業。
いつも通りの判断。
いつも通りの一日。
その中で、
ほんのわずかな判断のズレが生まれる。
そしてそのズレが、
一瞬で現実になる。
機械は止まらない。
重力は待ってくれない。
刃物はためらわない。
事故は、
人の都合を待ってくれない。
だからこそ安全とは、
一度作れば終わるものではない。
毎日作り直さなければならない。
慣れたときこそ疑う。
大丈夫だと思ったときこそ確認する。

それが安全である。
もし私たちが
「今まで大丈夫だった」
という言葉をお口にをしたとき、
その瞬間こそ

最も危険な瞬間

なのかもしれない。
事故は、
遠くにあるものではない。
それはいつも、
私たちの日常の中にある。
静かに、
そして確実に。

第4章

安全四層理論 (Safety Four-Layer Theory)

事故は単一の原因で起きるのではない。

多くの場合、複数の要因が重なり合い、事故という結果に至る。

私は長年、現場と教育の双方に関わる中で、安全には一つの構造が存在することに気づいた。それが

安全四層理論

である。

安全四層理論とは、安全が次の四つの層によって支えられているとする考え方である。

第一層

技術層 (Skill)

知識・技能・ルール・法令

作業を安全に行うための**技術的基盤**である。

具体的には

- ・ 作業知識
- ・ 技能訓練
- ・ 作業手順
- ・ 安全ルール
- ・ 法令遵守

などが含まれる。

例えばフォークリフトの運転技能、

作業手順の理解、

安全教育、

資格制度などはすべてこの層に属する。

この層は

「安全を知る・安全にできる」能力

を支える基礎である。

しかし、

知識や技能があっても事故は起きる。

なぜなら

人は必ずしも**知っている通りに行動するとは限らない**からである。

第二層

習慣層 (Habit)

行動パターン

人が日常的に繰り返している

行動のクセである。

現場では多くの作業が

習慣によって行われている。

例えば

確認を省略する癖

手順を簡略化する癖

危険に慣れてしまう癖

こうした習慣は

本人が意識していない場合も多い。

しかし事故の多くは

この習慣の層で生まれる。

なぜなら

人は毎回考えて行動しているわけではなく、

多くの行動を**無意識の習慣**で行っているからである。

第三層

心理層 (Mind)

思考・感情

人の内面にある

心理状態である。

例えば

慣れ

油断

慢心

焦り

思い込み

こうした心理状態は

判断に大きな影響を与える。

「これくらい大丈夫だろう」

という一瞬の判断が、

事故の引き金になることは珍しくない。

人間は合理的に行動する存在ではなく、

感情や思い込みに強く影響される。

そのため

心理の層が乱れると、

安全行動は簡単に崩れる。

第四層

文化層 (Culture)

組織風土・空気・上司の姿勢

個人を取り巻く

職場の文化である。

例えば

安全より効率を重視する空気

上司の安全に対する姿勢

同調圧力

暗黙のルール

こうした文化は

個人の行動に強い影響を与える。

人は

ルールよりも

職場の空気に従うことがある。

もし職場に

「これくらい大丈夫」

という空気が存在すれば、

どれだけ教育をしても安全は崩れる。

逆に

安全を最優先する文化があれば、

事故の可能性は大きく下がる。

四つの層の関係

安全四層理論の重要な点は

これら四つの層が

独立して存在するのではなく

互いに影響し合っている

ということである。

文化は心理に影響する。

心理は習慣を作る。

習慣は技術の使われ方を変える。

そして

このどこか一つでも崩れると、

事故の可能性は高くなる。

逆に言えば

安全を高めるためには

技術だけでなく

習慣

心理

文化

すべての層に働きかける必要がある。

安全とは構造である

安全は

知識だけでは守れない。

ルールだけでも守れない。

設備だけでも守れない。

安全とは

構造である。

そしてその構造を支えているのが

技術層

習慣層

心理層

文化層

という

四つの層である。

これが

安全四層理論

である。

第5章

人は慣れに殺される

人は慣れる。
これは人間が持つ、
とても優れた能力である。
人はどんな環境にも適応する。
新しい仕事。
新しい道具。
新しい危険。
最初は怖い。
最初は慎重になる。
最初は何度も確認する。
だが、
それは長くは続かない。
人は慣れる。
数日。
数週間。
数か月。
同じ作業を繰り返すうちに、
恐怖は消えていく。

最初は慎重だった動きが、
次第に速くなる。
最初は確認していた場所を、
いつの間にか見なくなる。
最初は守っていた手順を、
いつの間にか省略する。
人はそれを
成長だと思う。
熟練だと思う。
経験だと思う。
しかし安全という視点から見ると、
そこにはもう一つの側面がある。
それは

感覚の麻痺

である。
危険は、
変わっていない。
機械の力も、
重力も、
刃物の鋭さも、
昨日と何も変わっていない。
変わったのは
ただ一つ。

人間の感覚

である。

人は危険に慣れる。

最初は怖かった機械も、
毎日触れていれば恐怖は消える。

最初は気になっていた音も、
やがて背景の一部になる。

最初は違和感だった状況も、
いつの間にか日常になる。

そしてある日、
こう思う。

「これくらい大丈夫」

この一言が、
事故の入り口になる。

事故とは、
突然起きるものではない。

それは

慣れの中で静かに育つ。

最初の違和感。

小さな手抜き。

一度の省略。

それが何も起きなかったとき、
人はこう思う。

「やっぱり大丈夫だった」

この成功体験が、
次の省略を生む。

そして省略は
習慣になる。

最初は例外だった行動が、
いつの間にか

普通のやり方

になる。

この状態を、
多くの現場は見逃している。

事故が起きるまで、
誰も気づかない。

なぜなら、

そこにいる全員が

同じように慣れているから

である。

人は危険だけに慣れるのではない。

人は

違和感にも慣れる。

最初にした

「おかしいな」という感覚。

その小さな声は、
時間とともに小さくなる。
周囲の誰も気にしていない。
今まで問題は起きていない。
そう思ったとき、
違和感は消えていく。
しかし本当は、
消えたわけではない。

ただ

聞こえなくなっただけ

なのである。
そして人は、
もう一つのものにも慣れる。
それは

同調圧力

である。
現場には空気がある。
早く終わらせる空気。
手順を省略する空気。
「このくらい普通」という空気。
その空気の中で、
一人だけルールを守るとは難しい。

「そこまでやる必要ある？」

「前からこうやってるよ」

そう言われたとき、

人は迷う。

そして多くの場合、

空気に従う。

それが人間だからだ。

こうして

慣れは広がる。

一人の慣れが、

二人になる。

二人の慣れが、

現場の常識になる。

そしてある日、

事故が起きる。

そのとき人は言う。

「まさか」

しかし事故は

突然起きたわけではない。

それは長い時間をかけて、

静かに育っていた。

慣れの中で。

違和感を無視する中で。

同調する空気の中で。

事故は、

そのすべての結果として現れる。

人は慣れる。

危険にも。

違和感にも。

同調圧力にも。

しかし

命は慣れない。

重力は慣れない。

機械は慣れない。

刃物は慣れない。

人間だけが慣れる。

そしてその慣れが、

判断を鈍らせる。

その瞬間に、

事故は現実になる。

だから安全とは、

慣れと戦うこと

である。

慣れない人間はいない。

慣れない現場もない。

だからこそ必要なのは、

慣れない仕組み
慣れない確認
慣れない視点
である。
違和感を言える空気。
止められる勇気。
疑う習慣。
それが安全を守る。
最後に、
この言葉をもう一度伝えたい。

人は慣れる。
危険にも。
違和感にも。
同調圧力にも。
だが命は、

慣れに殺される。

第6章

遺族の一日

事故は、
その瞬間で終わる。
しかし、
遺された人の時間は終わらない。
朝が来る。
いつもの朝と、
何も変わらないように見える朝。
目覚ましが鳴る。
カーテンの隙間から光が入る。
それでも家の中には、
昨日まで確かに存在していた

一人の気配

がない。
昨日までは、
ここにいた。
朝、眠そうな顔で起きてきて、
コーヒーを飲みながらテレビを見ていた。
「今日も仕事か」

そんな何気ない会話をして、
靴を履き、
ドアを開けて出ていった。
ただそれだけの、
普通の朝だった。
それが
最後の朝になるとは
誰も思っていなかった。
電話が鳴ったのは、
昼前だった。
知らない番号。
出るかどうか
少し迷う。
そして受話器の向こうから、
聞いたことのない声が聞こえる。
「落ち着いて聞いてください」
その言葉を聞いた瞬間、
胸の奥がざわつく。
嫌な予感というものは、
なぜか外れない。
「ご家族の方が…」
そこから先の言葉は、
うまく理解できない。

事故。
病院。
すぐ来てください。
言葉は聞こえているのに、
意味が頭に入らない。
ただ手が震えている。
時計を見る。
時間は、
普通に進んでいる。
外では車が走り、
誰かが笑い、
世界は何も変わらず動いている。
なのに、
自分の世界だけが止まる。
病院の廊下は静かだ。
消毒液の匂い。
白い壁。
冷たい空気。
案内された部屋の前で、
足が止まる。
扉の向こうにいるのは、
昨日まで一緒にいた人。

そう思うと、
扉を開ける勇気が出ない。
しかし扉は開く。
そこにいるのは、
確かにその人だ。
顔も、
髪も、
見慣れた姿。
でも、
何かが違う。
声がない。
呼吸がない。
ぬくもりがない。
昨日まで確かにあったものが、
そこにはもうない。
人はその瞬間、
理解する。
もう戻らない。
事故は一瞬だった。
しかしその一瞬が、
これからの人生すべてを変えてしまう。
家に帰る。

靴がある。
服がある。
使っていたコップがある。
昨日までの生活が、
そのまま残っている。
それなのに、
その人だけがいらない。
夕方になる。
いつもなら
「ただいま」と声が聞こえる時間。
しかし玄関は
静かなままだ。
テレビの音だけが
部屋に流れている。
夜になる。
食卓には
一人分多い箸が並んでしまう。
そしてその箸を見たとき、
初めて涙が出る。
事故は、
統計では語られる。

件数。

割合。

原因分析。

しかしその数字の一つひとつの裏には、
こういう一日がある。

一つの事故の向こうには、
一つの人生がある。

そしてその人生の周りには、
家族がいる。

友人がいる。

仲間がいる。

事故とは、
一人だけの問題ではない。

その一瞬で、
多くの人の人生を変えてしまう。

だから安全とは、
ルールではない。

義務でもない。

それは

誰かの人生を守る行為

なのである。

現場で作業するとき、
機械を動かすとき、
確認をするとき。
その一つひとつの行動の先には、
必ず誰かがいる。
帰りを待つ人。
一緒に食卓を囲む人。
笑い合う人。
その人たちの時間を守ること。
それが

本当の安全

である。
事故は、一瞬で起きる。
しかしその影響は、
一生続く。
だからこそ私たちは、
もう一度考えなければならない。
安全とは何か。
なぜ守るのか。
それは会社のためではない。
ルールのためでもない。
それは
誰かの明日を守るためなのである。

第7章

安全は独占するものではない

安全とは何か。

この本では、

さまざまな角度から安全を考えてきた。

資格という幻想。

事故の本質。

慣れという人間の弱さ。

そして安全四層理論。

しかし最後に、

どうしても伝えておきたいことがある。

それは

安全は独占するものではない

ということだ。

世の中には、

安全に関する知識がたくさんある。

研究者が積み上げてきた理論。

企業が蓄積してきた技術。

現場が経験してきた教訓。

それらは本来、

人の命を守るために存在している。

しかし時として、
それらは閉じられてしまう。
会社の中だけで共有される。
専門家の世界だけで語られる。
一部の人しか触れられない知識になる。
理由はさまざまだ。
競争がある。
立場がある。
守るべき利益がある。
それ自体を
否定するつもりはない。
しかし一つだけ、
忘れてはいけないことがある。
それは

事故は境界を選ばない

ということだ。
事故は、
会社を選ばない。
事故は、
業界を選ばない。
事故は、
国境さえ選ばない。

危険は、
どこにでもある。
そして事故が起きたとき、
失われるのは

人の命

である。
もしどこかの現場で
事故を防ぐ知識があるなら、
それは
その現場だけのものではない。
もしある会社が
事故を防ぐ方法を知っているなら、
それは
他の現場にも届くべきものだ。

安全とは、
競争するものではない。

安全とは、

共有するもの

なのである。
この本を書いた理由も、
そこにある。
安全を独占したいからではない。
むしろ逆だ。

安全を

広げたい

からである。

もしこの本を読んだ人が、
現場で一つの危険に気づいたなら。

もし誰かが、
いつもより一回多く確認したなら。

もし一人の作業者が、
「おかしい」と声を上げたなら。

それだけで、
この本には意味がある。

安全とは、
特別なものではない。

それは
日常の中にある。

確認すること。

声をかけること。

違和感を見逃さないこと。

その小さな行動が、
事故を防ぐ。

そして事故を防ぐことは、
未来を守ることでもある。

誰かが今日、
無事に家に帰ること。
家族と食卓を囲むこと。
笑いながら
一日を終えること。
それは決して、
当たり前ではない。
多くの人の注意と、
努力と、
知恵によって守られている。
安全とは、
目に見えない。
だからこそ、
軽く見られやすい。
しかし安全が失われた瞬間、
人は初めて気づく。
それがどれほど大切だったかを。
安全は、
一人では作れない。
安全は、
現場だけでも作れない。
それは

人と人がつながり、
知識が共有され、
経験が伝えられることで
初めて育つ。
だから安全は、
独占するものではない。
安全は
広げるもの
である。
この本が、
その小さなきっかけになればいい。
そしていつか、
どこかの現場で
一つの事故が防がれたなら。
それだけで、
この本は役目を果たしたことになる。
安全とは、
難しい理論ではない。
それは
人の命を大切にするという
とてもシンプルな行為
なのだから。

あとがき

—それでも、明日も現場は動く—

この本を書き終えた今、

改めて思うことがある。

それは、

安全という言葉の重さである。

安全という言葉は、

とてもよく使われる。

会議でも、

講習でも、

報告書でも。

「安全第一」

その言葉は、

多くの場所に掲げられている。

だが、

その言葉の本当の意味を

どれだけの人が考えているだろうか。

安全とは、

特別なものではない。

それは

当たり前の一日を守ること

である。

朝、

家を出る。

仕事をする。

そして夜、

家に帰る。

それだけのこと。

だがその「それだけ」は、

決して当たり前ではない。

事故が起きると、

多くの人が原因を探す。

誰が悪かったのか。

何が足りなかったのか。

そして新しい対策が生まれる。

だが、

どれだけ対策を重ねても

事故は完全には

なくなる。

それが現実である。

それでも、
安全を考える意味はある。
なぜなら
事故は
減らすことができる
からである。
一つの事故を防げば、
一つの人生が守られる。
一つの家庭の時間が守られる。
それは決して
小さなことではない。

現場では、
今日も多くの人働いている。
重い機械を扱う人。
高い場所で作業する人。
危険と隣り合わせの仕事を
している人たちがいる。
その人たちが
毎日無事に家に帰ること。
それが
安全の意味である。

安全とは
誰か一人が守るものではない。
現場の作業者だけでもない。
管理者だけでもない。
経営者だけでもない。
制度を作る人だけでもない。
安全は
すべての人が関わるもの
である。

もしこの本を読んだ人が、
現場で一度だけ
周囲を見渡してくれたなら。
危険に気づいたとき
一言声をかけてくれたなら。
いつもより
ほんの少し慎重に
作業してくれたなら。
それだけで
この本には意味がある。

安全は
大きなことから
始まるわけではない。
ほんの小さな行動から
始まる。
確認すること。
声をかけること。
止まること。
それだけで
事故は防げることがある。

明日も、
現場は動く。
多くの人が働く。
そして
多くの人が
家に帰る。
その当たり前の一日を
守るために
安全は存在している。

この本が
その当たり前の一日を
守るための
ほんの小さなきっかけになれば
それ以上の喜びはない。

最後に、
この言葉を残して
筆を置こうと思う。
安全とは
人を家に帰す仕事である。

著者紹介

人は慣れる。

危険にも。

違和感にも。

同調圧力にも。

だが命は、慣れに殺される。

この言葉を現場で伝え続けている安全講師がいる。

吉田 峻。

1984 年生まれ。愛知県出身。

労働安全衛生講師。

建設、製造、物流などの現場に関わりながら、フォークリフト、車両系建設機械、高所作業車などの技能講習・特別教育の講師として安全教育に登壇している。

しかし講習を重ねる中で、

彼は一つの疑問にぶつかる。

なぜ資格を持っている人が事故を起こすのか。

なぜルールがあるのに事故はなくなるのか。

その答えを現場で探し続ける中でたどり着いたのが、

安全は構造で守るものという考え方だった。

技術層

習慣層

心理層

文化層

この四つの層によって安全を守るという

「安全四層理論」を提唱。

事故を個人のミスだけに押し付けない、

現場の構造から安全を考える思想として体系化した。

彼の講習は、知識の説明だけでは終わらない。

なぜ事故が起きるのか。

人はなぜ油断するのか。

なぜ違和感を見逃してしまうのか。

人間の心理から安全を考える講習は、

多くの作業者に強い印象を残している。

彼が繰り返し語る言葉がある。

安全とは、

会社のためにあるものではない。

安全とは、

人が無事に家へ帰るためのものだ。

その信念から彼は言う。

安全は独占するものではない。

安全は広げるものだ。

事故は一瞬で起きる。
しかしその影響は、一生続く。
本書は、
現場で感じてきた疑問と経験、
そして安全への思想をまとめた一冊である。
もしこの本によって、
どこかの現場で一つの事故が防がれたなら。
それだけで、この本には意味がある。

